



CENTER NEWS

SEPTEMBER 2014

www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp



欧州医学教育学会 AMEE2014 開催地ミラノの建築と会場風景 (孫)

Contents

- 東京大学の医学部認証評価準備について 2
大西 弘高 (講師)
- アジア太平洋医学雑誌編集者会議 (APAME) 2014 ... 3
北村 聖 (教授)
- 西太平洋地区医学教育会議 3
大西 弘高 (講師)
- 第 46 回日本医学教育学会大会 4
大西 弘高 (講師)・孫 大輔 (講師)・
春田 淳志 (大学院博士課程)
- AMEE 欧州医学教育学会 2014 参加記 4
孫 大輔 (講師)・春田 淳志 (大学院博士課程)
- 医学教育国際協力学特論 I 5
大西 弘高 (講師)・山本 健 (大学院博士課程)
- 臨床診断学実習 5
孫 大輔 (講師)・澤山 芳枝 (特任専門職員)
- 模擬患者つつじの会 5
孫 大輔 (講師)・澤山 芳枝 (特任専門職員)
- 東京大学医学教育セミナー 6
大西 弘高 (講師)
- 医学教育基礎コース 6
山本 健 (大学院博士課程)・孫 大輔 (講師)
- マーストリヒト大学大学院 MHPE コース 7
孫 大輔 (講師)
- メアリー・リー特任教授 まもなく来日 7
タフツ大学医学部教授 Mary Yu-mee Lee
- センター日誌／編集後記 8

東京大学の医学部認証評価準備について

大西 弘高（講師）

2010年9月、米国での臨床研修を希望する海外医学部卒業者に許可を出す組織であるECFMG（Educational Commission for Foreign Medical Graduates）が「2023年以降は、LCME（Liaison Committee for Medical Education：北米の医学部認証評価機関）やWFME（World Federation for Medical Education）と同等の基準を用いた認証評価を受けた医学部の卒業生のみが申請できる」という公告を出した。多くの国の医学教育関係者は、この公告に敏感に反応し、認証評価システムの設置や改革を迫られている。

わが国でも、全国医学部長病院長会議、日本医学教育学会、文部科学省が高い関心を持って取り組みを始め、東京医科歯科大学の奈良信雄先生を中心に、東京女子医科大学、新潟大学、慈恵会医科大学、千葉大学、東京大学の6大学連携による文部科学省GP事業が開始された。東京女子医科大学は、2012年にAMEWPR（Association for Medical Education in Western Pacific Region）のメンバーらによる国際外部評価を受けた。また、東京医科歯科大学、新潟大学、慈恵会医科大学、千葉大学が2013～2014年に認証評価トライアルを行い、現在結果を待っている。

東京大学もGP事業の一翼を担うため、2014年初頭に宮園浩平医学部長が2015年2月に認証評価トライアルを受審することを決断し、その主な業務を医学教育国際研究センターで担うこととなった。2014年3月には国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会（以下、準備委員会）を組織し、教務委員長を歴任された飯野正光先生に委員長を依頼し、当センター教員3名と老年科の江頭正人先生が幹事として作業を推進することにした。私は、幹事代表として業務を執り行い、4月からは福田牧子学術支援職員にその支援に携わってもらうことになった。

3月5日の第1回準備委員会では、自己点検評価報告書の作成という主なタスクが示され、医学教育認証評価に関する説明、質疑応答が行われた。準備委員会と8領域のワーキンググループ（以下WG）全体を含めた組織図（図）が承認された。また、認証評価のポイントは、①アウトカム基盤型教育、②臨床教育の実質化、③学習者評価とアウトカムの連動、④学生の声を採り入れた医学部運営、⑤教員やプログラムの評価システム（institutional research: IR）、⑥ガバナンスを持った医学部管理運営、であることが示された。そして4月9日の教授総会で、大西から医学教育認証評価に関する説明することとなった。

3月30日には第1回国際基準に基づく医学教育認証評価FD（以下FD）が開催され、東京大学医学部のアウトカムが議論さ

れた。2014年8月現在、①医学知識、②臨床技能、③コミュニケーション、④チームリーダー、⑤社会的視点、の基本的アウトカム5項目と、⑥創造的思考、⑦プロフェッショナリズム、⑧国際的指導者、⑨全人的医療、⑩未来への志、の発展的なアウトカム5項目の合計10項目にする方向性で教務委員会、教授総会の承認を待っている。

4月23日の第2回準備委員会では、準備委員会と8つのWGのメンバー案が示され、医学系研究科の全教授がいずれかの領域に入ること、医学教育に深く関与している教員が各領域でのWGを支援すること、各WGのリーダーは教授陣が務めることが決定された。認証評価に関する質問が多かったため、各WG会議に先立って医学部認証評価FAQも作成した。各WGのリーダーには、自己点検評価報告書の構造（大項目・中項目・BおよびQの小項目、A～Dの内容の違い）に関する個別説明を行い、各WG会議の日程調整と会議資料や議事要旨取りまとめの支援を約束して、快く引き受けていただけたことになった。

5月29日の第3回準備委員会では、8つすべてのWGで会議が行われた旨報告があった。各領域で自己点検評価報告書の記載が開始されたことで、幹事側には様々な資料に関する要請が来たため、医学部事務や教養学部への資料請求のルートを一本化した。

6月3～5日、7月1～3日には、それぞれ慈恵会医科大学、千葉大学の医学部認証評価が行われ、各WGリーダー、幹事、事務担当者を中心に、見学させていただいた。会場設営、準備すべき資料、参加者、教育現場の見学などについて、具体的なイメージができるようになった。

6月13日には、第2回FDが開催され、卒業試験のあり方を中心に学生評価が議論された。第1回FDで方向が決まったアウトカムに基づいて議論が進み、従来の卒業試験の廃止、クリニカルクラークシップ評価の重視、実習後OSCEの導入の検討などの方向性が打ち出された。

7月30日の第4回準備委員会では、自己点検評価報告書の進捗確認、来年2月の認証評価受審スケジュール素案について報告された。また、いくつかの領域において当センターが東京大学医学部の医学教育に関与している旨記載があったため、ミッションの見直しについて議論がなされた。

8月末の時点では、準備は比較的順調に進んでいると考えている。この場を借りて、協力いただいている多くの先生方、関係者に改めて感謝したい。

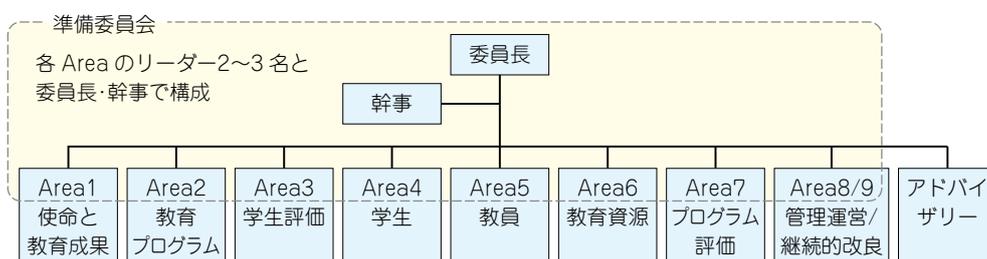


図. 国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会 組織図



▲ 認証評価準備委員会の風景

アジア太平洋医学雑誌編集者会議 (APAME) 2014

北村 聖 (教授)

アジア太平洋医学雑誌編集者会議 (APAME) 2014 は 8 月 15-17 日にモンゴル国の首都ウランバートルで開催された。この会議は WHO 西太平洋地区事務所 (WPRO) の後援の下、毎年開催されているもので、昨年は東京で開催された。昨年からはインドやネパール、バングラディッシュなど東南アジア地区 (SEARO) に含まれる国も参加するようになった。この会の目的は、参加国で発行されている医学雑誌とその編集の質の向上を通して、医学情報の交流を発展させようというものである。

医学雑誌を発行している先進国は日本を筆頭に、韓国、中国、シンガポール、フィリピンなどであり、類似の活動と同様に不正論文の撲滅や、オンライン出版、査読の質の向上などが話し合われた。さらに、この地域内には医学雑誌のない国や、ラオスやフィジーのように 1 種類しか発行していない国などもあり、情報の伝播・流通が困難な状況にある。このような状況で、それぞれの国において研究者を励まし研究成果を論文にまとめることを定着するような活動をこの会のもう一つの目標として続けている。

会に先立つ 4 日間、ウランバートルで論文執筆のためのワークショップが APAME と WHO の共催で開催され、モンゴルの若手研究者に論文執筆の技術と研究の心構えが教育された。学会では、北村

聖が「医学教育を通じた国際協力」という基調講演を行った。東京大学医学教育国際研究センターはラオスの医学教育の改革を支援した折、医学雑誌の創刊も支援し、今でも「Laos Medical Journal」に対して資金援助をしたり、編集委員として参画したりしている。

北村聖は今回の会議で 2 年間の会長職を次のフィリピンの編集者に渡し、肩の重荷を下ろすことができた。その交代のあいさつで、私が「二つの地区に含まれる 32 国が固く結び合うことが願いです」と発言したら、次期会長は、「国の数は 32 国ですが、世界の人口の 53% がこの地域に含まれる」とおっしゃり、改めてアジア地域の重要さを認識した。



▲ 集合写真

西太平洋地区医学教育会議

大西 弘高 (講師)

西太平洋地区医学教育会議 (Association for Medical Education in the Western Pacific Region: AMEWPR) は、WHO の西太平洋地域事務所 (Western Pacific Region Office) 管轄の国々を中心に (近年、台湾が国ではないものの正式加盟し、国という概念を超えた会合になっている) 医学教育に関する意見交換を行う場である。2014 年 6 月 7 ~ 8 日に台北で行われた会合に出席したため、報告する。

AMEWPR は、2001 年には地域性を考慮した形で「西太平洋地区における WHO 卒前医学教育質管理ガイドライン (WHO Guidelines for Quality Assurance of Basic Medical Education in the West Pacific Region)」を策定した経緯がある。これは、認証評価基準としても利用可能な内容である。そして、2008 年、2010 年の会合は日本で開催され、東京女子医科大学の吉岡俊正理事長が会頭として取り仕切ってきた。なお、上記のガイドラインは、2008、2010 年の会合において一部改訂されたものが、<http://www.amewpr.org.au/docs/wfme-global-standards-amewpr-specifications.pdf> にて閲覧可能である。

6 月 7 日午前は、各国代表者によるクローズドな懇談会が開かれ、日本からは医学教育学会の伴信太郎理事長が代表として参加された。私は、2008、2010 年に名ばかりの事務総長として吉岡先生をサポートしていた経緯があり、今回の会議にも出席を許可していただいた。いくつかの情報としては、AMEWPR メンバーによるベトナムの 2 箇所の医学校への外部評価、日本の援助によるモンゴルでの教育病院新設 (北村教授が調査に参画した無償資金協力案件)、親会議である WFME (World Federation of Medical Education) 事務局のコペンハーゲン大からジュ

ネーブへの移設などであった。WFME の財政基盤は弱いが、今後各国の認証評価組織の認証作業を通じて強化されていくのではないかとこのコメントもあった。

6 月 7 日午後 ~ 8 日は、認証評価に関して、WFME (Dr. Lindgren)、ECFMG (Educational Commission for Foreign Medical Graduates: Dr. Cassimatis) からの見解が紹介されると共に、AMEWPR (Dr. Ahn)、SEARAME (東南アジア地区医学教育会議、the South-East Asian Regional Association of the World Federation for Medical Education: Dr. Sood) の各地域での将来像に関する講演があった。また、奈良信雄先生からの日本の報告を含め、全ての国々からのプレゼンテーションがなされた。ただ、ラオス、カンボジアからは誰も出席しておらず、状況が確認できなかった。

改めて明らかになったのは、途上国を含めて、医学部の認証評価は検討される時代になりつつあるという点である。タイやマレーシアでは 10 年以上の歴史があるし、フィリピンやインドネシアでも制度は根づいている。一方、世界一の医学校数 381 校を誇るインド、8 年制博士課程 11 校・7 年制修士課程 25 校・5 年制学士課程 101 校を併せ持つ中国は、認証評価制度導入へのハードルが非常に高いことも知ることができた。



▲ 台湾医学教育認定評価院ライ会長

第 46 回日本医学教育学会大会

大西 弘高 (講師)・孫 大輔 (講師)・春田 淳志 (大学院博士課程)

シンポジウム 3 「e ラーニングを機能させるためのシステムと考え方」において「医学教育における e ラーニングの背景」の講演を行った。e ラーニングの魅力を増すには instructional design が必須、e ラーニングが適した教育目標を選別すべき、動画教材など既存のよい内容を共有しつつ効率的なカリキュラム開発の必要性を示した。

また、シンポジウム 5 「臨床推論の教育」において「臨床推論の評価法:Key Feature 問題について」、パネルディスカッション 6: COI 委員会企画「教育の COI: あなたの影響力の方向性は間違っていますか?」において「医学教育に関連した利益相反」の講演をし、座長を務めた。シンポジウム 5 は臨床現場での指導だけでなく、医学部での教育にどのように組み込むべきかについての具体的な話題提供となった。パネルディスカッション 6 では、研究発表の COI 以外に教育の COI も新たに問題にしていこうという主張が中心となった。(大西)

「医学部教育における総合診療・地域医療教育の現状調査」という口演発表を行った。日本プライマリ・ケア連合学会卒前教育プロジェクトチームが実施した、全国医学部を対象とした総合診療・地域医療教育に関する調査結果である。80 大学中 38 大学の回答で、実習が必修であるのは 28 大学 (73.7%)、6 年間での総実習数平均は 2.6 週と比較的短く、教育内容として総合診療に関す

るもの(家族志向性ケア、終末期ケアなど)が少ないという結果であった。また自由記載で、各大学において専門医からの理解不足や受け先の確保に困難があるという現状が明らかになった。他の発表者からも、各大学における地域医療教育の現状が発表され、同様な困難を抱えながらも工夫をこらしている様子が伺えた。(孫)

「医師の『職種に対する認知度/被認知度』の 2 次元マッピングによる分析」、「医師の『職種に対する認知度/被認知度』と『社会的スキル』の関係」という 2 演題の口演を行った。医師は「医師の役割は他職種に認知されていると思っているが、医師自身は他の職種を知らない」という「認知のヒエラルキー」を内在している可能性があること、社会的スキルが高い医師は「認知のヒエラルキー」を緩和していることを示した。協同研究者として 2 つの演題にも関わったが 1) Cultural adaptation and validating a Japanese version of the readiness for interprofessional learning scale (RIPLS) の発表は International session で賞を獲得し、2) 本邦における大学・専門職養成校における多職種連携教育の現状調査も大きな反響を得ることができた。(春田)



▲ 多職種連携教育研究の共同研究者たちと

AMEE 欧州医学教育学会 2014 参加記

2014 年度の AMEE (Association for Medical Education in Europe) 学術集会は、8 月 30 日から 9 月 3 日までミラノにて開催された。世界 93 ヶ国より約 3300 人が参加し、当センターからは講師の孫と大学院生の春田が参加した。Plenary では Lancet 編集長の Dr.Horton による示唆に富む講演があり、wellbeing, capability, intergenerational equity など現代の医療におけるキーワードが示された。

Short Communication では、孫が “Transforming health professionals’ attitudes toward patients and clients by Café-style health communication” という口演発表を行った。医療者と市民・患者が参加するカフェ型ヘルスコミュニケーションによって、医療者の患者に対する意識や態度が変容するという内容である。質疑応答でも多くの質問をいただき、この活動への関心の高さを伺わせた。

春田は “How to Use Strategic Formative Feedback and Reflection to Develop Expertis” “Death comes to us all: practical opportunities to integrate learning about living with dying into medical education and practice” のワークショップと生涯教育に関するシンポジウムなどに参加した。各セッションでは Feedback と Reflection を関連させ学習を深めるような質問を促すフレーム、緩和ケア教育の構造とそれが含む問題、

孫 大輔 (講師)・春田 淳志 (大学院博士課程)

そして複雑化した社会の問題に対して Comfort zone に留まることなく Learning zone に向かいもがく (Struggle) 必要性などが示された。

アジアからは、日本人研究者による発表も毎年増えてきている一方、シンガポール、タイ、インドネシアなどからの発表が目立った。今後、日本から発信する医学教育研究の質と量をもっと増やして行くことが肝要であろう。

9 月 2 日夜には、学会参加した日本人 60 数名のうち 45 名での夕食会が開かれ、美味しいイタリア料理とワインを堪能しながら互いに交流を深めた。また来年の Glasgow の AMEE 参加を目標に、本学での教育実践と研究を進めて行く所存である。



▲ Short Communication で発表する孫講師

医学教育国際協力学特論 I

2013年4月より、医学教育国際協力学部門は医学系研究科国際保健学専攻の協力講座となった。これに関連し、前期には医学教育国際協力学特論I、後期には同特論IIを開講していたが、2013年度は特に受講者がなかった。2014年度前期は9名の受講者が登録したため、本格的なゼミが開始された。

コースの目的は、「国際標準の医療者教育学の基本を学ぶと共に、国際教育協力に関する考え方や方法論を深めていく」である。毎週水曜日午後1～4時の時間帯で、1～2時間は対話型の授業、残りはそこで出された課題についてグループで討論し、発表した後にフィードバックするという形式で進んだ。また、最後の4回は、最終プロジェクトワークの準備、グループ討論、発表会などに充てた。授業日程と内容は表の通りである。

9名の参加者が2名の外国人（ミャンマー、ネパール）を含んでいたため、授業は全て英語で行われた。また、プロジェクト発表も、全員が何らかの形で発表に参画し、全て英語で行われた。医療系のバックグラウンドを持つ者が多く、また半数以上が海外でのボランティアなど、何らかの協



▲ 医学教育国際協力学：最終発表会

大西 弘高（講師）・山本 健（大学院博士課程）

力活動の経験をしてきたため、各自の経験を踏まえた議論ができたのが非常に良かったと思われる。

発表会の後に、コース評価をしてもらったが、評判は上々だったと感じた。一方で、授業の進め方に関して参加者の経験を踏まえた議論を中心に進めたが、「先生（大西）は国際協力の現場でどのような取り組みをどう考えておこなってきたのかをもっと知りたかった」という声も聞かれ、学習者中心の教育のあり方について改めて考えてみる機会になったとも感じている（大西）。

医学教育を体系的に勉強する場合は限られていますが、本コースではKernのカリキュラム開発の6段階アプローチを中心に討論形式で学ぶことができました。また教育者の視点としても、学習者評価が択一試験ではなく、プロジェクト発表とレポート提出で行われた点が勉強になりました（山本、大学院生として受講）。

表：授業日程と内容

日程	内容	日程	内容
4/16	講義：医療者教育とニーズ評価	6/4	講義：国際教育協力
4/23	講義：カリキュラム開発の考え方	6/11	講義：プロジェクトマネジメント
4/30	講義：カリキュラム開発の方法論	6/18	PW：テーマ設定 (PW：プロジェクトワーク)
5/7	講義：教育方略、学習方略	6/25	PW：プロジェクト討論1
5/14	講義：学習者評価の総論および各論	7/2	PW：プロジェクト討論2
5/21	講義：カリキュラム評価	7/9	PW：プロジェクト発表

臨床診断学実習

孫 大輔（講師）・澤山 芳枝（特任専門職員）

当センターは4年生の臨床診断学実習のうち「医療面接実習」および「技能実習」の教育に主に携わっている。医学生が初めて診断や診察の基礎を学び、臨床推論を身につける重要な実習である。

4月9日の「臨床医学入門」では北村教授が医師の基本的な心構えとプロフェッショナリズムに関し講義を行った。4月16日の孫講師による「医療面接実習総論」では、模擬患者を相手にしたデモンストレーション、病歴聴取のフォーマット、学生同士のロールプレイ、医療面接実習での注意点など、また臨床推論のパターン（仮説演繹法、パターン認識法、アルゴリズム、徹底検討法）、ケースをもとにした臨床推論の演習を行った。

「模擬患者による医療面接実習」は毎回2班ずつ担任教員により実施され、模擬患者が参加している。この実習は各班2回実施されるが、1回目は医療コミュニケーションを重視し、2回目は臨床推論をやや重視した教育となる。

教員からは「実践的でよい」、「医師としての心構えを養う上でも有効」など、学生からは「緊張したが難しさや足りない点があった」、「想像以上に実践的で勉強になった」などのフィードバックを得ている。



▲ 医療面接実習総論における医療面接デモンストレーション

模擬患者つつじの会

孫 大輔（講師）・澤山 芳枝（特任専門職員）

模擬患者つつじの会は、2014年3月に4年ぶり3回目となる外部評価を受審した。評価者からは、以前は低かった評価項目に関しても改善が認められることなど、全体としておおむね高い評価を頂いた。評価コメントとして、養成コースは定着しているものの、その後のスキルアップのためのプログラムの確立やSP（模擬患者）の活動の機会を増やす必要があること、SP同士の交流の場を設定するなどさらなる工夫が必要とのことであった。

春に新会員（第5期生）を募集したことにより、男性3名、女性5名の計8名を新たに迎えることとなり、会員は総数36名となった。新期生は計4回の模擬患者養成コースを受講した後、8月の修了試験を通過し、新たな認定SPが誕生した。養成コースにおいて、先輩SPは新人SPの指導役にまわり、SP同士の学び合いも活性化している。

今年度の後半（10月以降）では、東京大学での医療面接実習やOSCE、東京医科歯科大学の医療面接ならびにOSCE、卒業時OSCEなどが続けて実施される予定であり、活動の機会が増えている。また今年度より新たに、東京医科歯科大学の歯学部OSCE(6年生対象)に、つつじの会SPが協力することが決定した。他学部のOSCE参加は初めての試みとなる。



▲ 模擬患者つつじの会の茶話会

東京大学医学教育セミナー

大西 弘高 (講師)

ほぼ月例で開催している東京大学医学教育セミナーは、2014年3月～7月に第63～68回を実施した。参加者数は、概ね30～40名といったところだが、第65回は63名、第68回は73名と非常に盛況であった。

Tyastuti先生は、4年間の大学院博士課程での研究成果をまとめて発表した。インドネシアで展開した大規模な多職種連携学習プログラムの試みは、地域基盤型の多職種連携教育のプロトタイプになり得ると思われた。

Pickering先生は、プロフェッショナリズムの教育と評価について、McGill大での取り組みについて Cruess 夫妻らの知見に基づいた議論を展開した。P-MEXの限界についての話題は、理論と現実の違いについて知るよい機会となった。

北村教授は、近年議論になる機会が急増した不正論文に関する医学雑誌編集者会議での取り組みを紹介した。今後、どのような対策を行うべきかについて、方向性を探る上で非常に参考になる話題であった。

藤沼先生は、日本プライマリ・ケア連合学会での取り組みを含め、総合診療、家庭医療を専門とする医師のコンピテンシーについて明快にまとめられた。米国、英国での現状なども踏まえ、日本での今後の専門医像を論じる際の基盤となる情報であった。

山本雄士先生は、東大医学部卒で医療経営の方向に針路をとったユニークな経歴の持ち主である。病院の経営戦略についての理論的な背景について、分かりやすくまとめたいただいた。



▲ 第65回セミナーでの北村教授

山本則子先生には、日本の看護師が行っている、あるいは将来行うべき「看護」に関して、総論的に論じていただいた。近い将来予測される少子高齢化への対応には、看護師養成においても診療所での看護、訪問看護などに重きを置く必要があるとのメッセージであった。

- 第63回 3月20日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者: Dwi Tyastuti 先生
東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 博士課程修士
テーマ: 「インドネシアでの多職種連携学習プログラムの試み」
- 第64回 3月26日(水) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者: Joyce Pickering 先生
マギル大学医学部医学科副学科長・准教授
東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 特任准教授
テーマ: 「プロフェッショナリズムの教育と評価」
- 第65回 4月15日(火) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者: 北村 聖 先生
東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 教授
テーマ: 「不正論文をなくする研究者教育～医学雑誌編集者会議の取り組み～」
- 第66回 5月20日(火) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者: 藤沼 康樹 先生
日本生活協同組合連合会医療部会 家庭医療学開発センター長
テーマ: 「総合診療を専門とする医師のコアコンピテンシー」
- 第67回 6月11日(水) 18:00～19:30 医学図書館 3F310 会議室
講演者: 山本 雄士 先生
ソニー CSL リサーチャー、株式会社ミナケア
テーマ: 「医療戦略の本質 ～病院が取るべき戦略」
- 第68回 7月28日(月) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者: 山本 則子 先生
東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 成人看護学分野 教授
テーマ: 「日本の看護: 現在と将来」

医学教育基礎コース

2011年度から始まった医学教育基礎コースは、本学医学部のFDの一環として、主に新任の医学部教員や附属病院の教育担当スタッフを対象に、実践的な教育法について学べるコースを実施している。2014年度は表のように全10回のセッションを予定し、一通り受講することで教育理論の基礎から効果的な教育実践法、応用的なテーマまで学べるようになっている。

例えば、第1回の「よい教育者になるために」では、学習者中心性や学習の動機づけ、振り返り・省察など基本的な学習理論に関して、第2回の「魅力あるレクチャーの方法」では、学習者

	日時	テーマ	講師
第1回	2014.4.22	よい教育者になるために	大西
第2回	2014.5.13	魅力あるレクチャーの方法	北村
第3回	2014.6.17	インストラクショナル・デザイン	孫
第4回	2014.7.15	カリキュラム開発概論	大西
第5回	2014.9.16	研究倫理の教育	北村
第6回	2014.10.21	多職種連携教育 (IPE)	孫
第7回	2014.11.18	学習者評価とアウトカム基盤型教育	大西
第8回	2015.1.20	プロフェッショナリズムの教育	北村
第9回	2015.2.17	コミュニケーションの教育	孫
第10回	2015.3.17	臨床推論の教育	大西

山本 健 (大学院博士課程)・孫 大輔 (講師)

の記憶に残るような教育のコツとして全体像とゴールの提示や相互作用の重要性、第3回の「インストラクショナル・デザイン」では、学習の目標・評価・方略の一体化や、学習の意欲をデザインするARCSモデルなど授業設計の基本を、第4回の「カリキュラム開発概論」では、Kernの方法やアウトカム基盤型教育について、といった内容の講義やワークが行われた。

毎回10～20名前後の参加があり、学内のみならず学外の教員、多職種が参加している。テーマに関心のある方、新たに教育担当になった方などの積極的な参加をお待ちしている。

学内の方の参加費は無料 (学外の方は1000円)、医学図書館3階M1室にて、毎回18:00～19:30で開催している。問合せは、kenyamamoto@umin.net (担当: 山本) あるいは sond-tky@umin.net (担当: 孫) まで。



▲ 第1回「よい教育者になるために」の講義をおこなう大西講師

マーストリヒト大学大学院 MHPE コース

孫 大輔 (講師)

1991年、EU（欧州連合）の創設を定めたマーストリヒト条約が調印されたマーストリヒトはオランダ南部に位置する古都であり、ドイツとベルギーの国境にも近く、マース川を有する風光明媚な街である。マーストリヒト大学大学院にはdistant learningを基本とした医療者教育学の修士コース（Master of Health Professions Education: MHPE）があり、近年医学教育学を体系的に学びたい医療者や教員が世界中から集まっている。筆者も2年間の本コースに入学し、5月半ばからの3週間、スクーリングのため現地へ赴いた。同級となる新生は約30名で、国籍はオランダ、ベルギー、スイス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、マレーシア、シンガポール、オマーン、サウジアラビア、エジプト、タイ、コロンビア、そして日本とまさにグローバルである。ちなみに筆者以外に日本からは信州大学の清水郁夫先生、京都大学の宮地由佳先生が入学した。

MHPEコースの3週間のプログラムは、講義が最小限となっており、他はPBL（Problem-based Learning）やグループワークを中心に進められる。その過程でさまざまな学習理論を学びながら、効果的な教育方略はどのようなものか、教育の評価はどのようにすべきか、教育研究を行うためのアカデミックスキルといったことを学ぶ。「根拠を説明すること」を“justification”というが、このコースで叩き込まれたのは、いつも根拠を説明する

こと（always explain why）、そのための仲間とのディスカッションや深く考える力が、アカデミックスキルにつながるということである。大量の文献を読み込みながら、英語で長時間ディスカッションを行い、また5人のグループで架空の教育プログラムとjustification documentを作成するという課題（計40ページ!）は相当ハードワークであったが、3週間が終わる頃には英語でのスピーキング力やディスカッションに少し自信がついていた。MHPEコースの最大の利点は、共に学習する仲間が世界中にできること、世界レベルの医学教育学研究をする自信がつくことであり、筆者のキャリアにとっても転回点となったと感じている。

また週末や休日には小旅行に出かけ、欧州の文化を楽しんだ。ベルギーのブリュッセルでは世界一美しい広場と言われるグランプラスで仔牛肉とベルギービールを味わった。また、フランス・パリではルーブル美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館などをはしごし、ノートルダム大聖堂の壮麗さに度肝を抜かれた。

本コースで学んだことを生かし、良質な医学教育の実践と研究を通じて、本学および日本の医学教育の発展に大いに貢献できるよう精進したい。



▲ MHPEコースの仲間たちと

メアリー・リー特任教授 まもなく来日

10月から来年3月までの半年間、特任教授として滞在されるメアリー・リー先生の自己紹介文です。

タフツ大学医学部教授
タフツメディカルセンター教育改革特別顧問
Mary Yu-mee Lee, MD, MS, MA, FACP

I am truly honored to be IRMCE's next Kimitaka Kaga Visiting Professor. I warmly anticipate meeting new colleagues at Todai and throughout Japan. I hope to share my interests in how innovations in faculty development, leadership training, integrated technology, and open access can transform professional education and global health.

As an internist, clinician educator, former dean for educational affairs, and associate provost, I have worked at all levels of clinical training and administration across Tufts' Medical Center, Medical School, and University. I directed interdisciplinary educational and global health initiatives spanning undergraduate, graduate, and professional schools across three campuses. My work included strategic planning and institutional change; academic leadership training for chairs and directors; open access initiatives, Tufts OpenCourseWare, and TUSK (an open source, enterprise-level curriculum management system for health sciences used in 15 countries). I was trained through and served as faculty for both the Stanford Faculty Development and the Harvard Macy Clinician Educator Programs, working with a broad range of faculty in the USA and abroad. I served as the technical lead for USAID's One Health Core Competency Development (for pandemic training in Southeast Asia and Africa).

I eagerly look forward to learning about the systems and culture of Japan, and collaborating on a range of projects and initiatives. I attended Tufts (BA, MD) and Stanford (MA, MS) Universities, and reside in Belmont, Massachusetts with my husband, Paul. Our son resides in San Francisco and our daughter in New York City. I enjoy gardening, traveling, and all types of art.

外国人特任教員の招聘に際し、米国財団法人野口医学研究所にご支援をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。



3 MAR	
5日	第1回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会
11日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・外部評価
18日	医学教育基礎コース（25年度第10回） 「コミュニケーションをいかに教えるか」（孫）
20日	第63回東京大学医学教育セミナー 「インドネシアでの多職種連携学習プログラムの試み」（東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 博士課程修了生 Dwi Tyastuti 先生）
26日	第64回東京大学医学教育セミナー 「医学領域のプロフェッショナリズムの教育と評価」（東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 特任准教授 Joyce Pickering 先生）
30日	第1回認証評価から考える医学部教育総合的 改革 FD

4 APR	
15日	第65回東京大学医学教育セミナー 「不正論文をなくする研究者教育 ～医学雑誌編集者会議の取り組み～」 （東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 教授 北村聖先生）
22日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
22日	医学教育基礎コース（26年度第1回） 「よい教育者になるために」（大西）
23日	第2回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会

5 MAY	
13日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
13日	医学教育基礎コース（26年度第1回） 「魅力あるレクチャーの方法」（北村）
21日（～10月1日）	臨床診断学実習（第1回医療面接実習）実施
20日	第66回東京大学医学教育セミナー 「総合診療を専門とする医師のコア・コンピテンシー」（日本生活協同組合連合会医療部会 家庭医療学開発センター長 藤沼康樹先生）
29日	第3回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会

6 JUN	
7～8日	西太平洋地区医学教育会議（台北）出席（大西）
11日	第67回東京大学医学教育セミナー 「医療戦略の本質 病院が取るべき戦略」 （ソニー CSL リサーチャー株式会社ミナケア 山本雄士先生）
13日	第2回認証評価から考える医学部教育総合的 改革 FD
17日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
17日	医学教育基礎コース（25年度第3回） 「インストラクショナルデザイン」（孫）

7 JUL	
15日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
15日	医学教育基礎コース（26年度第4回） 「カリキュラム開発概論」（大西）
28日	第68回東京大学医学教育セミナー 「日本の看護：現在と将来」 （東京大学大学院医学系研究科 成人看護学分野 教授 山本則子先生）
18～19日	第46回日本医学教育学会大会出席 （北村・大西・孫・春田）
29日	クリニカルクラークシップ指導医講習会
30日	第4回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会

8 AUG	
7日	平成26年度第1回運営委員会
14～17日	アジア太平洋医学雑誌編集者会議2014（モン ゴル）出席（北村）
26日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
27日	第3回認証評価から考える医学部教育総合的 改革 FD
30日（～9月3日）	欧州医学教育学会 AMEE2014 出席（孫・春田）

編集後記

来年2月に行われる東京大学医学部認証評価を見据え、IRCMEでは2014年の年明け頃から地道な準備作業が続けられてきました。7年に一度の大イベントを前に、IRCMEも医学部全体にもわかに慌たしくなり、専門分野の垣根を超えた会合が頻繁に行われています。その一方で、この編集後記を書いている今、予想もしなかったデング熱の話題が世間を騒がせています。このセンターニュースがお手元に届く頃には蚊の活動も止み、お騒がせ者のデング熱がすっかり収束していることを祈るばかりです。さて、次号27号のセンターニュース発行は半年後を予定しています。今回のように多岐にわたる活動をご紹介できるよう、一同精進してまいる所存です。（み）

発行元

発行 2014年9月25日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学大学院医学系研究科附属
 医学教育国際研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 医学部総合中央館2F
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ